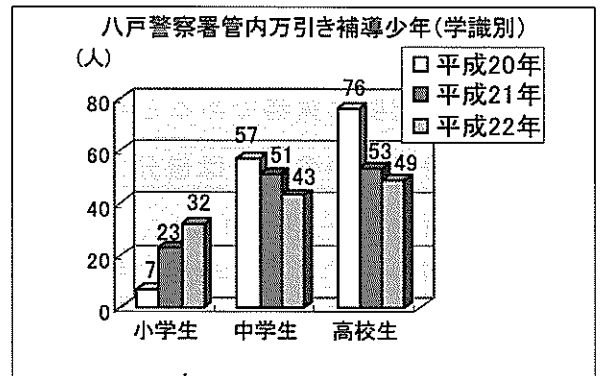


小学生による「万引き」が増加しています

八戸市民総ぐるみで、青少年の「万引きゼロ運動」を展開しましょう

右のグラフは、八戸警察署管内の万引きで補導された小・中・高校生の最近3カ年の人数の推移を表したものです。中・高校生は減少傾向にあるものの、小学生は、ここ3年間増加の一途をたどっていることが分かります。万引きの低年齢化の傾向が顕著となり、極めて憂慮すべき事態を迎えています。22年度中八戸警察署管内の万引きの実態として、次のような特徴があげられます。



① 曜日別では、日曜日が最も多く、全体の約

30%を占めており、平日では、火・木曜日が多い。

② 被害品別では、玩具類が一番多く、続いて食品類・書籍類となっている。玩具類の中で多いのはトレーディングカードである。

③ 被害場所では、最も多いのがリサイクルショップで、続いてデパート、スーパーとなっている。

少年犯罪では、保護者や周りの大人が子どもの出すサインに気づかないために、犯罪に至っているケースが見られます。休日の子どもの行動を把握したり子どもの持ち物を確認したり、大いにコミュニケーションをとるように心がけ、子どもの変化を見逃さないことが大切です。家庭も地域社会も学校もみんなで声を掛けていきましょう。

自分の“いのち”は自分で守る

～「津波てんでんこ」から学ぶ防災意識～

八戸市教育委員会 教育長 松山隆豊

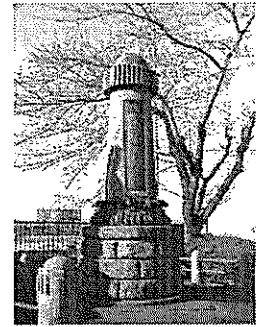
○ 未曾有の大災害

3月11日発生の東日本大災害は、千年に一度といわれる大地震とそれに続く大津波の襲来で、各地に未曾有の被害をもたらしました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。ここ八戸市においても、沿岸部を中心に甚大な被害を受けました。しかし、そんな中であって、市内2万1千人を超える児童生徒には一人のけが人もなく、全員無事であったことはこの上ない喜びです。



○ 子どもたちに何を伝えるか

今回の震災で、私たちは各地の悲惨な状況を目の当たりし言葉を失いました。「想定外」ともいわれましたが、古い文献や地質調査等によると、今回と同じかそれを凌ぐような津波は過去に何度もあったということです。考えてみれば、私たちはそのような大災害を生き延びた人々の“いのち”を受け継いで今を生きている、いわば生き延びた人たちの「末裔」ということができます。その生き延びた人たちの経験から生まれた「生きるための知恵」は、古老の言葉や言い伝え、記念碑などとして数多く残されています。ここ八戸市でも館鼻公園内に、『地震海鳴りほら津浪』と刻まれた昭和8年の三陸大津波の碑が建っています。戦前の物理学者で随筆家でもあった寺田寅彦は、「天災は忘れた頃にやってくる」と警鐘を鳴らしましたが、今回の震災で得た教訓を風化させることがあってはなりません。特に、未来へ“いのち”を繋ぐ子どもたちに何を伝えるかは、私たち大人に課せられた最も重要な責務であると考えます。



館鼻公園内の記念碑

○ 自分の“いのち”は自分で守る！

八戸市では今、「より強い、より元気な、より美しいまち」を目指した創造的復興に向けて動き始めています。八戸市教育委員会でも「安全確保・防災拠点整備・防災体制・学校教育」のそれぞれの視点から課題を検証し、今後に生かすための作業を開始しました。その根底には“いのち”の大切さ、かけがえのなさをしっかり据える必要があると思っています。特に、子どもたちには「自分の“いのち”は自分で守る」ことの意義と方法をしっかり伝える必要があると思います。

これまで幾度となく大津波の被害に遭っている三陸地方には、古くから「津波てんでんこ」という言い伝えがあるといえます。「てんでん」とは「手に手に」の転じたもので、各自・めいめいという意味です。「津波てんでんこ」とは、津波が来たら自分だけでも高台に逃げろという意味ですが、親子、夫婦間で助けようとして共倒れとなった例が多かったことから、一族の全滅を防ぐ知恵として受け継がれてきた教えだそうです。現在では、「自分の“いのち”は自分で守る」という意味で使われ、防災教育の基本として子どもたちにも教えられているそうです。新聞報道によると、釜石市北部の大槌湾を望む釜石東中学校では、揺れがおさまって校庭に避難した子どもたちは「津波てんでんこ」の教えどおり一斉に高台に向かって走り出したといえます。途中、隣接する鶴住居小学校の児童の手を引く中学生の姿も目立ったそうです。おかげで、子どもたちに一人の犠牲者もありませんでした。先人の知恵・教訓が子どもたちの“いのち”を救ったのです。

○ 「家族団らん」の中で

“いのち”の大切さは、学校教育の中でも教えますが、基本的には親から子へ、家族の中でしっかり伝えていかなければならないことだと思います。日本をはじめ東北アジアでは、西欧の「個人主義」に対し、伝統的に「家族主義」的考え方が根底にあるといえます。親子や一族の絆を大事にし、祖先から続く“いのち”の連続を「祖先崇拜」という形で実感してきました。ですから、お盆の墓参りなどは、“いのち”の連続を教える絶好の機会だと思います。また日常においては、家族全員が一カ所に集まり楽しく会話などをする「家族団らん」に勝る機会はないと思います。家族のその日の出来事や先祖から続く“いのち”のこと、今回のような大災害が発生した際の身の守り方など、話すことはいくらでもあると思います。この機会に薄れつつある「家族団らん」を復活させたいものです。家中の無駄な電気を消し、一カ所にみんなが集まり楽しく「家族団らん」することは、“いのち”の大切さを伝えるだけでなく、「節電」にも効果的であると思います。